ALCS 学修行動比較調査2019

全体結果梗概

ver.1

ALCSはAcademic Learning and Cultivation Surveyの頭字語です

大学間の中間活動体である教学比較IRコモンズでは、2015年からコモンズ参加大学において共通のウェブ・サーベイを用いた学修行動比較調査を実施しています。その結果は参加各大学において個別にそれぞれの目的に適った分析がおこなわれると共に、参加大学内で適宜有用性を判断しつつ比較分析・検討が施されています。ここでは調査実施母体である教学比較IRコモンズとして、個別大学に拠らず、有効回収基準を充たした全学生を総計した結果の一端について公開します。

今回は5年目の調査です。参加大学は22大学、2万人の大学生たちが寄せた回答結果から、またいくつもの発見と確認ができました。

なお、その他の結果や情報、方法の詳細についてはコモンズのwebページ（Google検索などで「教学比較IR」と）をご覧ください。

この枠内と右に示した結果は2019年に実施したALCS調査全体のデータ諸元です。

実査期間（全体）2019年7月 ～20年2月
調査実施方法　ALCS独自のスマート・ウェブ・サーベイ
調査大学数　　22
有効回収数　　20009

有効回収とは80設問への回答率が60%以上等、ALCSの有効回収3基準を満たした回収

回答者学年構成　　1年生63%　3年生37%　1、3年生間での比率
性別構成　男性28%　女性72%

20009名
有効回収数

54%
回収率
22大学間平均

93%
全回収数中の有効回収率

この調査は1、3年生を調査対象にすることを基本にしていますが、大学によっては別の学年でも実施しています。

参加大学（名称の50音順）大妻女子大学 岡山大学 お茶の水女子大学 嘉悦大学 川崎医科大学 京都看護大学 京都女子大学 共立女子大学 金城学院大学 就実大学 椙山女学園大学 津田塾大学 帝京大学 田園調布学園大学 東京女子大学 長崎県立大学 奈良女子大学 日本女子大学 フェリス女学院大学 宮城大学 横浜市立大学 横浜商科大学

経験　大学の授業や学びに関する経験

以下4つの設問群の箱ひげ図は調査比較対象各大学の1・3年生それぞれの各設問スコアリング・データ*の平均値を用い、それらを1年生の中央値の大なる順に設問ごとに表出した結果です。

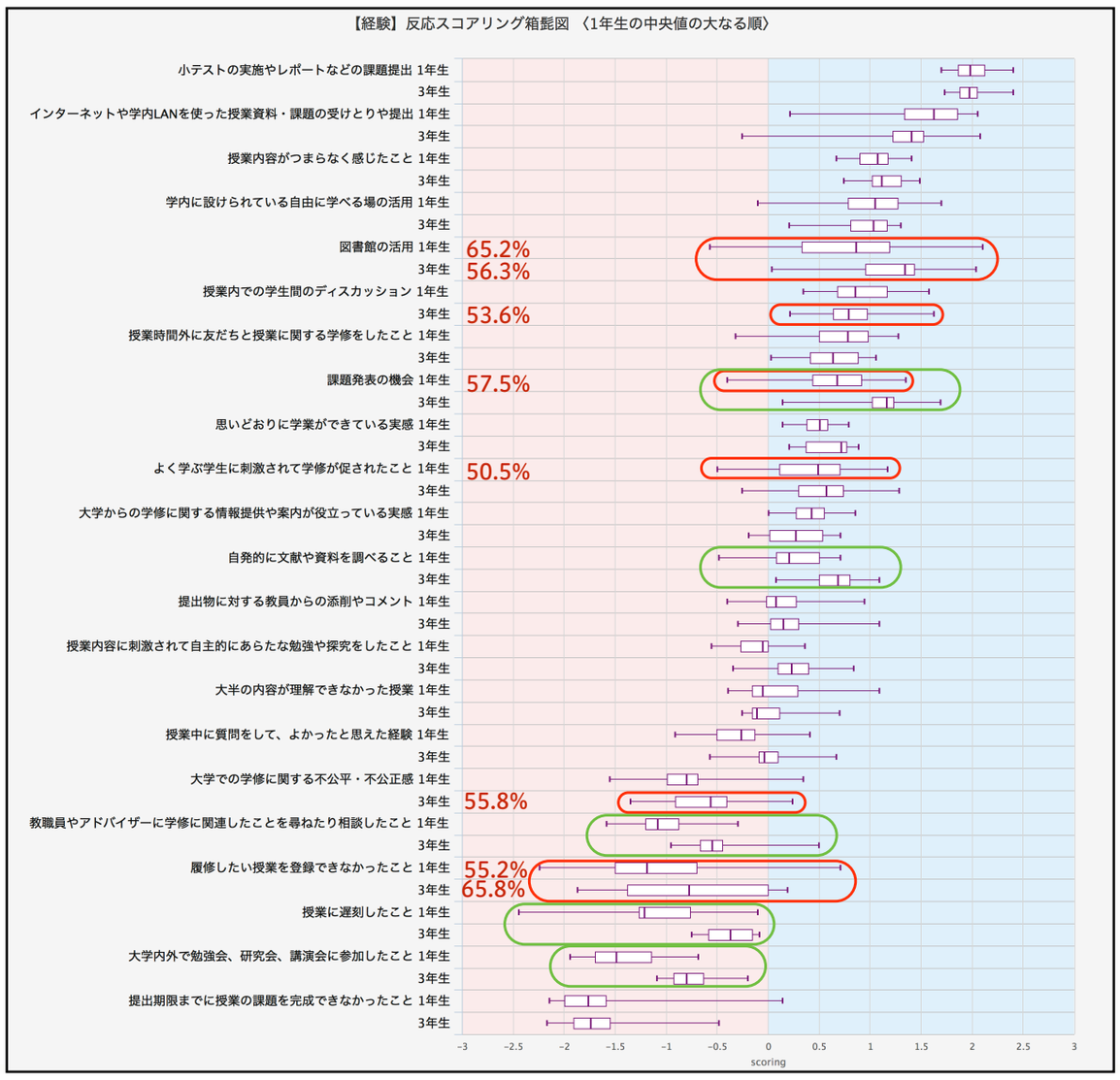
加えて、2年間の修学の結果として1-3年生間に明白な差異が認められた設問、すなわち二種の統計検定（U検定とWelchT検定）により両検定結果において相対的に大きな効果量が認められた設問*を緑色の枠で囲いました。また、比較対象になった大学のうち1、3両学年を調査した20大学各学年相互の設問毎190対について二種の統計検定（同上）をおこない同様に半数以上の対で大きな効果量を示し、統計的に有意な差異が認められた（つまり諸大学間での差異が顕著であった）設問は赤枠で示し、その有意差対の比較全組合せに占めた割合を%で記しました。

「経験」群は他の設問群に比してひげや箱の幅が相対的に大きく、学修関連の経験の多寡には大学間差異が比較的あることが一目でわかります。

箱の幅が大きい項目は大学間の差異が大きいことをあらわす目安です。なかでも赤枠の部分が統計的な有意差が確認された設問ですから、これらについてとくに自大学の位置づけを確かめ、その結果に対する解釈と評価、その結果としての対応が求められるところでしょう。

諸大学間差異が目立った「履修したい授業が履修できなかった」は大学の規模に依存する結果ですから容易には対応しがたいところでしょうが、同規模大学との差異は確認したいところです。「学生間のディスカッション」や「課題発表の機会」あるいは「図書館活用」などでのポジションは、学生主体の学修やアクティブ・ラーニングとの関係性において注視すべき箇所です。

対応にあたっては自大学よりも有意に高い評価を得ている大学の施策や実際のありようが第一の探究課題になります。それはこの比較IRコモンズの場を連携的な内部質保証に活かしていく典型的な方策でもあります。



成長　入学時からの成長感

全体にひげが肯定域にあります。大学によらず平均的には1年次秋において、すでに入学来の成長感が表明されています。1-3年生間では20設問中15問、75%について統計的に意味のある大きな効果量を認め、2年間の修学成果ともいえる成長感が得られていることが確認できました。

多様な大学が加わった調査にもかかわらず、1学年の1項目以外は、大学間差異は顕著には認められませんでした。例外となった1項（「英語以外の外国語の運用力」）は大学によってはそもそもカリキュラム自体に英語以外の外国語授業の設置がなかったり重視していない場合があることから、それがそのまま反映されただけの結果といえるでしょう。

もっとも成長感については大学の教育のみならず、青年期の自然な発達に対する自覚も組み込まれた評価になっていることは勘案すべきところです。

例年のことながら、こうした全体の傾性に反して3年生において成長感に衰退傾向が表明された設問がありました。「英語の運用力」です。この箱ひげについては、右ひげがとりわけ長い点も注目できます。つまり、最大値ないし上位評価において他の大方の大学と異質な大学があるということです。こうした特徴ある大学の秘密に迫ることは他の大学とって共通の関心事であるといえるでしょう。

*スコアリング・データの生成法および箱ひげ図、有意差検定についての詳細はコモンズめウェブ・サイト https://cmpir/comの説明をご覧ください。

時間

日あたり、または週あたり平均値

大学生が学びやアルバイトに費やしている時間数は世間的にも何かと注目されています。そのこともあってか、回答に際しても以前に比べると多少気づかった反応がなされるようになったのかもしれません。また、本年度あらたに調査に加わった大学での回答の影響もあったかもしれません。すべての項目、学年においてこれら時間数の調査全大学における平均値が延びました。

授業外の学修時間については、調査以来はじめて両学年ともに日あたり時間換算で多くの大学での授業時間1コマ分相当の時間を超えた値が示されました。ALCSでは学びの時間については週あたりと日あたりで直接、時間数を尋ねる設問を設定し、学生に応えやすい方で回答を求めていますが、この方法によって週あたりに学びをしているであろう日数も割り出しています（念を入れて設問でそれに関連した日数を直接記述する質問も設けて検証）。それによるとその平均日数は4.25日（むろん大学によってその値は相違）、したがって週あたりの授業外学修時間数は平均約401分、つまり6.7時間という値がみえてきます。

少し以前、全国的な学生調査などで日米の大学生の授業に関する授業外の学修時間について、日本の学生は1〜5時間が大勢を占め、それに対して米国では6〜10時間が最も多いといった結果が帯グラフなどと共に示され、「こんなに勉強しない日本の学生」といったマスメディアの喜びそうな言説が流布したことがありました。しかし、それにはそもそもその調査で設定されていた段階評定の区分の仕方の問題もありましたし、それをベースに区間度数を帯グラフなどで並べ比較したり、果ては区間平均をとって日本は3時間に対して米国は8時間などといった誤まった判断も誘発しました。しかし、そうした誤りも結果的には災いが福と転じたのかもしれません。つまり、それを契機に、大学全般にもっと学んでいる大学生活を当たり前のこととして認めようという雰囲気づくりができたといえそうだからです。実際、本年度の結果をみると、相変わらずバイトに勤しみ、しかし勉強にもそれなりに取り組んでいるという現代大学生の姿があらわれています。

授業外学修時間

1年生 92 分 / 日

3年生 97 分 / 日

授業に関連しない学習時間

1年生 45 分 / 日

3年生 78 分 / 日

アルバイトなどの就労時間

1年生 13 時間 14 分 / 週

3年生 14 時間 09 分 / 週

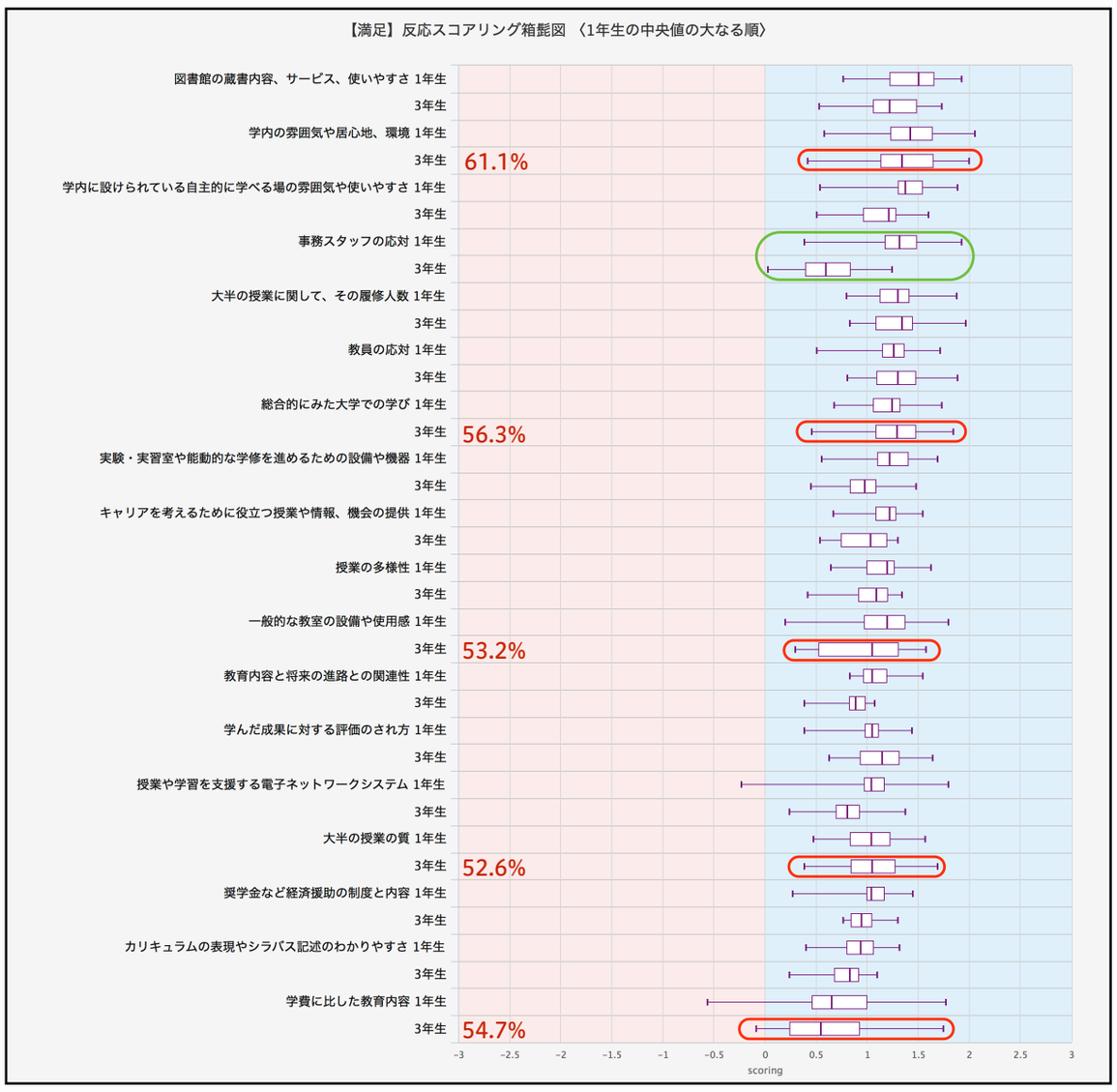
満足

教学に関わる満足度

「満足」群ではほぼ全項で各大学の平均値が肯定域に入りました。設問間の相対差異もあまりないことから「総じて満足」という無難な学生生活の日常が映し出されています。この傾向は毎年かわりません。ただし、まさにその「総合的にみた大学での学び」という設問に対する満足度は、とくに約2年半を過ごした3年生からの回答において諸大学間差異が半数以上の比較対で統計的に有意差をもって表出していることもわかりました。絶対的な評定でみれば概ね満足しているが、その満足感には大学間で明白な開きがあるということです。

同様に、いずれも大学で過ごした時間が長い3年生において「学内の雰囲気や居心地、環境」「一般的な教室の設備や使用感」「大学の授業の質」「学費に比した授業内容」に大学間差異が明確にあらわれました。ファシリティについては有意に高評価の大学の実際をうかがうことが、直接的に改善の参考になるはずです。コストパフォーマンスについては国公立と私学が共に入った調査であることの影響が当然にでていますが、同じ設置者のなかで有意差が認められるとすれば、その原因は探るべきところでしょう。問題は学生からの「授業の質」についての評定で、大学間に格差が見出された点です。この点の確認と検証は見過ごすことができません。

例年かわらず「事務スタッフの応対」への回答が、大方の大学で共通し、3年生で顕著に満足感を落しています。初年次での対応が厚いことによる相対差によるものと解釈できるところですが、諸要因考えられ、探るべきところでしょう。



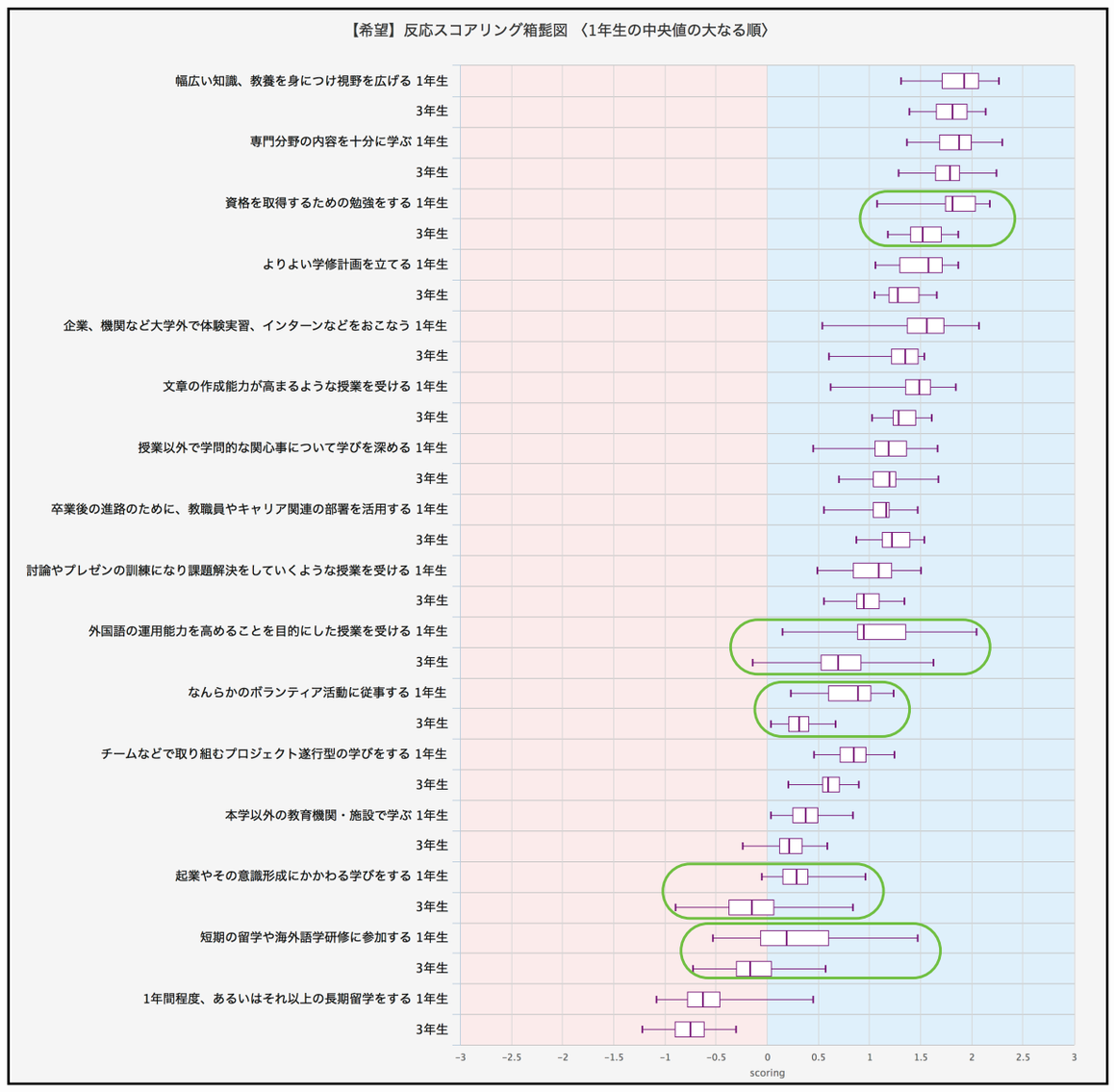
希望

在学中に望むこと

設問「希望」群の最大の特徴はすべての設問において諸大学間での差異が顕著には認められなかったことです。むろん、ここで顕著とは大学間相互の総当たり比較対の半数以上で統計的な有意差が認められた場合のことですから、有意差のなかった大学対がなかったということではありません。個別大学間の差異については公開の範囲を超えるためここでは立ち入りません。

3年生は回答時点での残りの大学生活が1年あまりです。よって入学初年次に比して在学中への望みは全般に低下します。その傾向は設問全般に認められますが、とくに「資格取得」「外国語運用能力」「ボランティア活動」「起業意識形成」「短期留学」といった具体的な実践を伴う学修に対する関心は1年次に比してはっきりと低下することが認められました。

また、例年のことですが、このように多様な大学の総合された回答の絶対的な値をみるかぎり、海外留学や起業意識の涵養、あるいは能動学習の典型ともいえるチーム学習などに対する大方の学生の望みは、大学側（というより実際は大学周辺の思いというべきか）が力を入れようと考えるほどには強くはないことが鮮明にわかります。むしろ大学の現場は学外のステークホルダーや省内官僚の見識と、この現実の大学生のあいだに立って戸惑っているという構図がこの結果から浮かんできます。実際の学生たちの大勢は、まるで昭和の時代の大学を思わせるような「幅広い知識や教養」あるいは「専門知を十分に学ぶ」ことに、最も強い望みをもって大学生活を送っているようです。



（編集・文責: 教学比較IRコモンズ 東 京一）